



筑紫女学園大学リポジト

叙述形容詞とカテゴリー

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 公開日: 2020-01-21 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 緒方, 隆文, OGATA, Takafumi メールアドレス: 所属:
URL	https://chikushi-u.repo.nii.ac.jp/records/997

叙述形容詞とカテゴリー

緒 方 隆 文

A Categorical Approach to Predicative Adjectives

Takafumi OGATA

1. はじめに

本稿は形容詞とその被修飾名詞の関係をカテゴリースキーマで表し、両者の関係を明らかにすることを目的とする。ここでの結論は、形容詞と被修飾名詞が包含関係になっており、スキーマ上で、カテゴリーと成員の関係で表されるとする。具体的には、包含関係を表す基本スキーマを2種類提示し、構文ごとにどちらのタイプをとるかが決まっていることを示していく。扱う対象として、目的語描写述語と主語描写述語、結果述語と小節述語、there 構文における叙述用法、尺度形容詞と評価形容詞での比較など叙述形容詞を中心に扱う。形容詞が現れる構文は多岐にわたるため、ここではすべて扱うことはできない。しかし形容詞と被修飾名詞が包含関係にあり、スキーマ上での意味表記は共通していると考える。形容詞と被修飾名詞の関係を考察するための基礎部分を本稿で提示できればと考えている。

以下構成であるが、2節で基本スキーマを示し、3節でカテゴリーと成員の包含関係について考察する。これを踏まえ4節で構文ごとのスキーマを見ていく。そこでは目的語描写述語と主語描写述語、there 構文における叙述用法などを扱う。5節で尺度形容詞と評価形容詞を通して、形容詞の比較表現をカテゴリースキーマで分析する。そして6節で名詞カテゴリーと形容詞カテゴリーの違いについて見ることにする。

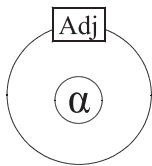
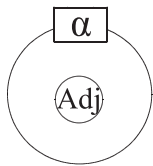
2. 形容詞構文の基本スキーマ

形容詞のふるまいを説明するとき、一時的形容詞と恒常的形容詞の分類がある*1。一時的形容詞は被修飾名詞の一時的状態を、恒常的形容詞は被修飾名詞の恒常的状态を表す。具体的には(1)

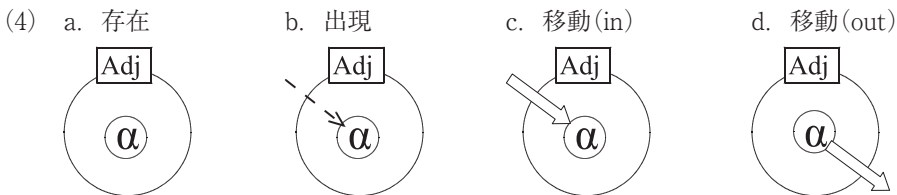
(2)のような形容詞がある(リストは久野・高見(2018: 5))。

(1) 一時的形容詞: sick, angry, hungry, tired, drunk, naked, open, asleep, empty, absent, available, etc.

(2) 恒常的形容詞: tall, intelligent, stupid, cross-eyed, deaf, faithful, left-handed, interesting, talkative, dead, etc.

この分類は有効な側面もあるが、説明できない例がある(後述)。そのため別の分類、ひいては基準が必要である。本稿ではカテゴリースキーマを用いて分析する。もっと言えば、カテゴリーと成員という包含関係により分析する。一時的形容詞では、被修飾名詞が一時的に形容詞の状態にある。スキーマでは(3a)に示すように、形容詞 (3) a.  b.  カテゴリー(Adj)内に、成員として被修飾名詞(α)が存在する。被修飾名詞(α)は形容詞カテゴリーの成員の時にだけ、その状態を持つ。一方恒常的形容詞は、カテゴリーと成員の関係が(3a)と反対になる。(3b)に示すように被修飾名詞(α)がカテゴリーとなり、形容詞の特性が成員になる。被修飾名詞(α)の成員として形容詞が存在することから、恒常的意味となる。この(3)が基本スキーマとなる。分析を進める上で、カテゴリースキーマ(3)と、一時的形容詞/恒常的形容詞は必ずしも対応しない。

この基本スキーマ(3)は、その状態がいつ存在するかによって、さらに細かく分類される(スキーマは(4))。(4)は(3a)タイプで示しているが、これと同じものが(3b)タイプにもある。まず(4a)は、(3)の状態が常に存在する。よって〈存在〉と呼ぶ。(4b)(4c)は最後に結果として(3)の状態が生じる(終点)。(4b)は出所が不明で移動を感じられず、出現したように感じるものになる。これを〈出現〉と呼ぶ(破線矢印で表記)。(4c)はカテゴリー内への移動と認識されるもので、移動後に(3)の状態が生じる(移動は実線中抜き矢印で表記)。これを〈移動(in)〉と呼ぶ。最後に(4d)は、最初に(3)の状態が存在し(起点)、成員がカテゴリー外に〈移動〉する。外に移動することで、(3)の状態がなくなる。これを〈移動(out)〉と呼ぶ。



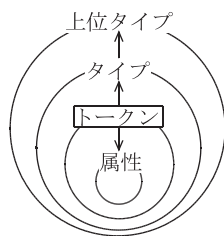
ここで注意しなければならないのは、(4)の分類は、もっぱら一時的な(3a)タイプで起こる。というのも(3b)は固有の特性を表すので、基本〈存在〉(4a)になるからである。

ここまで基本スキーマ(3)、細分類(4)を見てきたが、大切なことは、構文ごとにスキーマタイプが決まることにある。以下構文ごとに、どのスキーマタイプをとるかを見ていくが、その前にカテゴリーと成員の包含関係を次節で見る。

3. カテゴリーと成員の包含関係

2節で、形容詞と被修飾名詞の関係を、カテゴリーと成員の包含関係で示した。しかしこの包含関係は恣意的に決まるのではなく、ある程度法則性がある。その法則性を、緒方(2018)はコンピュータ文の分析で示した。緒方(2018)では措定文、(倒置)指定文、(倒置)同定文、(倒置)同一性文、定義文、ウナギ文、「象は鼻が長い」構文、カキ料理構文を考察し、すべてをカテゴリースキーマで表記し、意味の成り立ちと、特性の違いを示した。そしてコンピュータ文は〈包含〉と〈連結〉の2つの操作により生成されるとした。

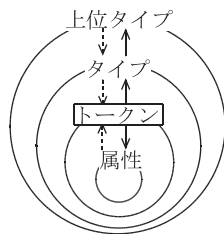
なかでもコンピュータ文の叙述用法に現れる形容詞は、措定文に含まれる。(5) 措定文では、〈包含〉関係、すなわちカテゴリーと成員の関係で意味が表される。そのため主語を形容詞で叙述する場合、(3)に示す包含関係によるスキーマとなる。包含といえど、何がカテゴリーになり、何が成員になるかは、(5)に示す方向性がある。(5)ではトークンを基準として、方向が逆になっている。2方向あり、一つは、[トークン] → [属性] (トークンがどのような属性を持っているか：(3b)に相当)、もう一つは、[トークン] → [タイプ] (トークンがどのようなカテゴリー(タイプ)に属するか：(3a)に相当)がある。よって形容詞の叙述用法は(3a)(3b)の両タイプがある。(6)は He's unhappy. の2つの解釈になる(久野・高見 2018: 59)



- (6) a. 一時的解釈「彼は、今(何かについて)不満感を持っている。」… (3a)タイプ
 b. 恒常的解釈「彼は、常に不満感を持っている。」… (3b)タイプ

しかし実際は方向性は(5)だけでなく、緒方(2018)で述べたように、逆の方向もある((7)では破線矢印で表記)。破線矢印方向になるのは、「NP1のNP2」の場合と、コンピュータ文であれば成員が際立ちの特徴を持ったもの、いわば典型的成員の場合の2つとした。

形容詞の場合、「NP1のNP2」に相当するのが限定用法になる。(7) 形容詞の限定用法では、(3b)タイプは適格で、(3a)タイプは不適格とされた(cf. Quirk, et. al 1985: 1242, 安藤 2005: 483-484, etc.)。 (8)は(3a)タイプの意味はなく、(3b)タイプの意味だけになる((8)は久野・高見 2018: 59)。



- (8) He's an unhappy man.

(限定用法の形容詞：恒常的解釈「彼は、常に不満感を持っている男だ。」のみ)

限定用法では、修飾することで名詞句の特性を限定する。一時的属性であれば、一時的な状態を表すだけとなり、名詞句そのものを限定するものとはなりにくい。そのため(3a)タイプの解釈が不適格になる傾向にある。

しかし(7)を見る限り、限定用法(破線矢印)にも両方向があるはずである。[属性]→[トークン] (タイプ(3b)に相当)と、[タイプ]→[トークン] (タイプ(3a)に相当)である。実際用例は少ない

が、(3a)タイプの意味を持つ限定用法があることを、久野・高見(2018)は指摘している。

(9) The Found Treasure of a Great Pianist - The New York Times (久野・高見 2018: 64)

そのため(7)に示すように、どちらも基本2つずつの用法があると言えるが、限定用法においては(3b)タイプが優勢であり、見慣れぬ(3a)タイプが不適格と判断されてきたと考えられる。次節で、こうしたことを踏まえ、叙述用法を中心に構文ごとに見ていくこととする。

4. 構文ごとのスキーマ

4.1. 目的語描写述語と主語描写述語

叙述用法の中には、(10)のような目的語描写述語と、(11)のような主語描写述語がある。

(10) a. John ate the meat raw. b. I love to drink coffee hot. (安藤 2005: 476)

(11) a. John left the room angry. b. John came home drunk. (*ibid.*)

これらはどちらも SVOC の C に形容詞が現れる構文だが、(10)では形容詞が目的語を叙述、(11)では形容詞が主語を叙述している。目的語描写述語、主語描写述語のどちらも、一時的形容詞が現れ、恒常的形容詞が現れないと言われてきた(McNally 1994 他)。つまり SVOC の C に一時的形容詞が現れれば適格で、恒常的形容詞が現れれば不適格とされた。(12)は目的語描写述語で恒常的名詞が、(13)は主語描写述語で恒常的名詞が現れる例になる。どちらも不適格となる。

(12) a. *She drank the milk tasty. b. *She answered the question interesting.

(13) a. *John left the party intelligent. b. *John enjoyed reading the novel fat.

(久野・高見 2018: 20)

そのため一見、目的語描写述語、主語描写述語は(3a)タイプに限定すればよいように見える。しかし久野・高見(2018)が指摘するように、(14)のように恒常的形容詞は現れることができる。

(14) a. John returned home **dead**. b. He was born **Chinese**.

c. He was born { **left-handed** / **deaf** / **cross-eyed** / **stupid** / **blind** }. (久野・高見 2018: 23)

そのため SVOC の C に現れる形容詞は、一時的形容詞、恒常的形容詞という分類では説明できない。久野・高見(2018: 23)では、(15)(16)のように分析する。つまり一時的形容詞、恒常的形容詞という分類をやめ、選択可能な選択肢の想起という概念で説明をする。

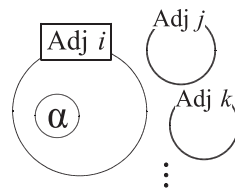
(15) 目的語描写述語構文に課される意味的制約：目的語描写述語構文は、目的語描写述語が、主語にとって選択可能で、比較対照される選択肢を想起させる場合に適格となる。

(16) 主語描写述語構文に課される意味的制約：主語描写述語構文は、主語描写述語が、比較対照される主語の状態に関する選択肢を想起させる場合に適格となる。

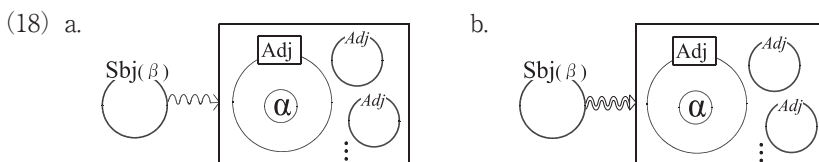
本稿は(15)(16)を引継ぎながらも、(3)の分類を維持して、カテゴリースキーマで分析していく。そのためには一時的形容詞=(3a)タイプ、恒常的形容詞=(3b)タイプという図式を壊す必要がある。つまり恒常的属性と思われるものでも、選択肢の中から選ばれる場合には、(3b)ではなく(3a)タイプと考える。選択肢があることで、もはや固有の属性ではなく、擬似的に一時

的状態にあると見なす。別様に言えば、恒常的属性が(3b)タイプのままであれば、対立する属性は選択肢になりえない。選べること自体、スキーマは(3a)タイプであると言える。

選択肢を伴う(3a)タイプのスキーマは、(17)になる。(17)では複数の形容詞カテゴリー(i, j, k, \dots)があり、その中からカテゴリー Adj_i が選ばれ、被修飾名詞 α (目的語) がその成員になる。目的語描写述語構文/主語描写述語構文では、(17)が基本スキーマになる。



以下個別に見ていく。まず目的語描写述語構文であるが、(18)に示すように2種類のスキーマがある。どちらも、 α が目的語、 Adj カテゴリーが補語、 $Sbj(\beta)$ が主語になる。目的語と補語の関係は(17)と同じで、ゲシュタルトとして一体化している((18)では□で囲って表記)。それに主語が関与する。主語の関与の仕方に、弱い場合と強い場合がある。弱い場合を一重波線矢印(18a)、強い場合を二重波線矢印(18b)で表記している。

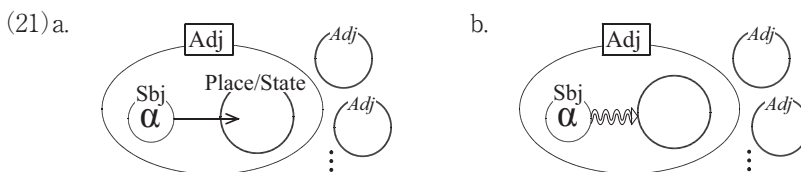


(18a)の例として、(19)がある。(19)ではゲシュタルト化した(17)部分(目的語と補語)への関与が弱い。want や keep することで、目的語への影響は弱い。一方(18b)の例として、(20)がある。(20)では(17)部分への関与が強く、何らかの変化がある。eat したり buy することで目的語が変化する。

(19) a. He wanted his motorcycle bran-new. b. This teapot will keep the tea hot.

(20) a. They eat most kinds of soup hot. b. I bought the used car cheap.

次に主語描写述語構文を見る。目的語描写述語構文と違い、形容詞カテゴリーの中で、被修飾名詞 α (主語) が移動したり、作用したりする。スキーマは2種類あり、それを(21)に示す。(21)はどちらも他の選択肢となる形容詞カテゴリーが、想起されている。



一つめの(21a)は、 α が場所または状態へと移動する。状態に移動するとは変化することを意味する。例を(22)にあげる。(22)では come や return という移動動詞が用いられている。一方(21b)では、主語 α が目的語に強く作用する(二重波線で表記)。例として(23)がある。(23)では行為動詞が用いられており、主語がある状態で、そうした行為を行うことを述べている。

(22) a. Her husband often came home drunk. b. All my sons have returned home alive.

(23) a. He ate the meat nude. b. Bill drove his car drunk.

なおSVOCのCに現れる形容詞が、主語と目的語のどちらを描写するかは、形容詞が持つ選択制限に委ねられる。目的語が選択制限に適合しなければ、主語が描写されることとなる。なお目的語/主語描写述語構文以外にも、SVOCのCに形容詞が現れるものがある。それを次節以降で見ていく。

4.2. 結果述語と小節述語

4.1節で述べた表現以外に、SVOCのCに形容詞をとる構文がある。一つは結果述語で、もう一つは小節述語である。どちらも4.1節同様、取るスキーマタイプが決まっている。まず結果述語であるが、緒方(2018)において結果構文の意味をカテゴリースキーマで分析した。結果構文には(24)のような他動詞構文と、(25)のような自動詞構文がある。

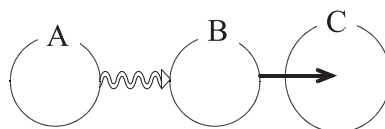
(24) a. She pounded the dough flat as a pancake. b. She painted the barn red.

(Carrier and Randall 1992: 183)

(25) a. The icecream froze solid. b. I danced myself tired.

(Simpson 1983: 143, 145)

そこでの結論は、結果構文は他動詞構文であれ自動



詞構文であれ、基本スキーマ(26)を共通して持つとした。(26)は、AがBに強く作用することで、BがC

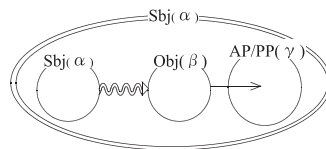
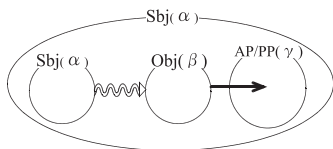
に移動し、カテゴリー(C)と成員(B)が包含関係になることを示している。Cには名詞句、形容詞句、前置詞句、不変化詞が入る。

形容詞句に限定して考えれば、(26)ではBが被修飾名詞(目的語)、Cが形容詞句(補語)になる。つまり結果構文のスキーマは(3a)タイプで〈移動(in)〉(4c)に限定される。

少しだけ細かく見 (27) a. 本来的結果構文

b. 派生的結果構文

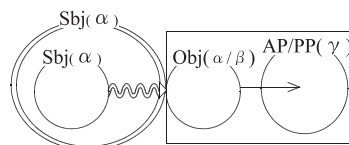
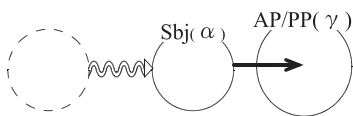
れば、他動詞構文であれば、動詞の意味から変化結果が自然に導かれる〈本来的



結果構文)と、そうでない〈派生的結果構文)があり、スキーマは(27)になる(緒方 2018: 44)*2。ま

(28) 非対格動詞

(29) 非能格動詞



た自動詞構文であれば、非対格動詞((28))と非能格動詞((29))でスキーマが異なる(緒方 2018: 45-46)。詳細な説明は緒方(2018)に譲ることとして、重要なのは、すべてのスキーマが(26)を基本とするので、結果構文での形容詞句C(補語)は、(3a)タイプで〈移動(in)〉(4c)を維持する。よって結果構文における被修飾名詞と形容詞句の関係は、(3a)タイプの〈移動(in)〉(4c)スキーマに限定される。

次に形容詞が小節述語として用いられる場合であるが、ここでもカテゴリータイプが限定される。小節とはSVOCのOCが主語と述語の関係になっているものを指す。小節述語のCは必須要素で、これがないと不適格になる。Cには形容詞句だけでなく、名詞句、前置詞句、動詞句が現れるが、ここでは形容詞句のみ見ていく。このとき(30)タイプと(31)タイプがある。(30)は〈移動(in)〉(4c)のスキーマを持つもので、(31)は〈存在〉(4a)のスキーマを持つ(30bのみ大庭 2011: 187)。

(30) a. The baby made our parents happy. b. I expect that man dead by tomorrow. (〈移動(in)〉(4c))

(31) a. They considered themselves intelligent. b. We need to find someone brave. (〈存在〉(4a))

(30a)では[両親]がカテゴリー[happy]に移動しており、(30b)では[男性]がカテゴリー[dead]に移動する。スキーマは(3a)タイプで〈移動(in)〉(4c)になる。一方(31)では目的語が補語(形容詞カテゴリー)の中に存在している。そのためスキーマは(3a)タイプで〈存在〉(4a)になる。ここでも構文、あるいは構造においてスキーマが限定されており、小節述語では(3a)タイプで、〈移動(in)〉(4c)と〈存在〉(4a)に限定される。

4.3. There 構文における叙述用法

There 構文において、意味上の主語を形容詞で叙述的に修飾する用法がある。このとき、形容詞は一時的形容詞のみが適格(32)で、恒常的形容詞は不適格(33)とされてきた((32)(33)は久野・高見 2018: 237; cf. Milsark(1974, 1977), Carlson(1977), Huddleston and Pullum(2002), 安藤(2005))。

(32) a. (After the banquet) there were several people sick.

b. (All over the world) there are people hungry.

c. At the beach yesterday, there were several people naked.

d. There were some people drunk at the party.

e. There were two delegates absent. (Huddleston & Pullum 2002: 1394)

(33) a. *There were several people tall.

b. *There are many linguists intelligent.

c. *There are many people crazy.

d. *There are three pigs stupid. (安藤 2005: 762)

e. *There were two delegates deaf. (Huddleston & Pullum 2002: 1394)

しかし久野・高見(2018: 238)では、致命的な反例として(34)をあげる。しかしこれに対する説明はなく、今後の研究に委ねている。(34)では恒常的形容詞が現れ、適格な文となっている。

(34) a. There's a sparrow **dead** over there.

b. In this country, there are four million people **illiterate / homeless**.

本稿はこれをカテゴリースキーマを通して説明する。形容詞は構文ごとにスキーマが決まるとしたが、there 構文にも意味的制約が課せられる。一つにthere 構文全体にかかるものと、一つ

に there 構文の意味的主語と叙述形容詞の関係にかかるものがある。

まず there 構文の意味的主語と叙述形容詞の関係から見る。久野・高見が指摘するように、一時的・恒常的という分類では説明ができないため、別の分析が必要である。ここではカテゴリースキーマを用いる。まず基本スキーマであるが、恒常的形容詞であっても、一時的なものを表し、(3a)タイプになることがあると考える。つまり恒常的形容詞は、意味的主語と叙述形容詞の関係では、(3a)タイプと(3b)タイプの2種類があると考え。そして適格になるのは、(3a)タイプのみになる。

(33)が不適格なのは、(33)が(3b)タイプのままだからである。一方(34)の恒常的形容詞は、(3a)タイプで、一時的と見なされていると考える。それではなぜ恒常的形容詞なのに、(34)では(3a)タイプになるかが問題になる。

本稿では、4.1節の目的語描写述語、主語描写述語の分析と並行的と考える。4.1節では、恒常的属性と思われるものでも、選択肢の中から選ばれる場合には、(3b)タイプではなく(3a)タイプとした。ここでも同様に、選択肢の中から選ばれるスキーマ(17)をとっていると考え。

(34)では選択肢として、デフォルトの状態と、そうでない状態が想起され、それらが選択肢となり、そうでない方が選ばれていると考える。選択肢があることから、恒常的形容詞であっても、すべて(3a)タイプになっている。(34a)は生きている状態と死んでいる状態、(34b)は読み書きができたり家がある状態とそれがない状態が、各々選択肢となり後者が選ばれている。

もちろん一時的形容詞が現れる(32)も同様に説明することができる。(32a)では健康と病気、(32b)では普通の状態と空腹状態、(32c)では着衣と裸、(32d)ではしらふと酔っ払い、(32e)では出席と欠席が選択肢となり、後者が選ばれている。

ここまで述べると、普通でないもの(デフォルトでないもの)だけが選ばれているように思えるがそうではない。単に選択肢がありさえすればよい。実際(35b)では選択肢があるにすぎない。

(35) a. *There are many people tall.

b. There are many people tall enough to touch this ceiling. (Milserk 1974: 39)

(35a)は恒常的形容詞が何ら選択肢が想起されない状態で特性を述べている。そのため(3b)タイプとなり不適格になる。一方(35b)では天井に手が届く高さ、届かない高さという選択肢が想起され、(3a)タイプになっている。この2つの選択に優劣はない。どちらかがデフォルトというわけでもない。それでも適格なのは、意味上の主語と叙述形容詞に課せられる制約が、スキーマ(17)の意味を持つからである。選択肢があることだけが要件と考えられる。

ちなみに選択肢が想起されさえすれば、(4d)の消失の意味も適格となる。(36)では過去分詞 disappeared が、人がいる状態といない状態が想起され、選択肢となることで適格となっている。

(36) There were almost 32,000 persons disappeared.

では(32)のような場合、なぜデフォルトでない状態が、叙述形容詞に選ばれるのであろうか。それは there 構文の特性から来ると考えられる。緒方(2015)で there 構文を(37)と考えた。

(37) there 構文とは、特定の成員を含むカテゴリーに関わる情報を、聞き手の新情報として、

話し手が提示する構文である。

(緒方 2015: 78)

つまり提示するとき、新情報として価値が高いのは、普通の状態ではなく、普通の状態でないもの(デフォルトでない方)になる。そのためデフォルトでない状態の方が、選ばれる傾向にある。

次に there 構文全体のスキーマ制約を見ていく。まず there 構文に現れる動詞から見る。動詞は非対格動詞に限定されると言われてきた*³。be 動詞はもちろん、それ以外にも存在・出現を表す動詞が there 構文に現れる(cf. Kimball 1973 他)。鈴木・安井(1994)では、(38) - (40)の3種類の動詞を示している(鈴木・安井 1994: 150-151)。一方消失を表す動詞は不適格となる(例は(41): 松井 2004: 2)

(38) 存在の動詞(verb of existence): dwell, exist, hang, lie, live, remain, reside, stand, survive, etc.

a. There exist several alternatives. b. At the edge of the forest there lived an old man.

(39) 出現の動詞(verb of appearance): appear, arise, begin, burst, develop, emerge, ensue, follow, grow, happen, loom, occur, open, return, spring up, take place, etc.

a. There arose a conflict. b. There ensued a dispute.

(40) 移動動詞(verb of motion): approach, arrive, come, enter, fly, go, run, tread, walk, etc.

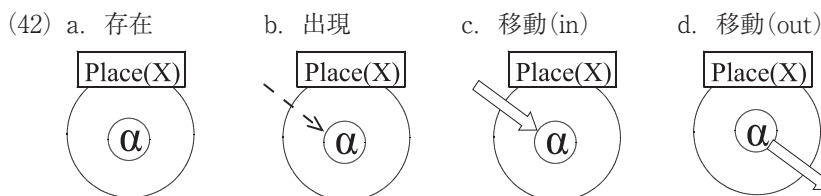
a. There came three suspicious-looking men down the street.

b. Along the river there walked an old woman.

(41) a. *There died an old man in the village. b. *There disappeared a stranger.

c. *There ended a riot.

(4)に対応するスキーマ(42)で言えば*⁴、〈存在〉(42a)、〈出現〉(42b)、〈移動(in)〉(42c)が適格で、〈移動(out)〉(42d) (消失の意味)が不適格となる。

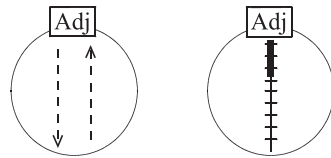


つまり there 構文全体にかかるスキーマ制約と、その一部である意味上の主語と述語形容詞にかかる制約とは別物ということになる。there 構文は(37)に示すように、聞き手の意識にカテゴリースキーマを出現させるための構文である。そのため〈移動(out)〉(42d) (消失)が許されない。しかし意味上の主語と叙述形容詞においては、〈移動(out)〉(42d) (消失)が許される((36))。つまり全体と構文一部の制約は必ずしも一致せず、むしろ形容詞と被修飾名詞の関係は独立したものと見なすことができる。

5. 尺度形容詞と評価形容詞における比較

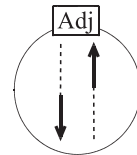
5.1 絶対尺度と相対尺度

本節では、尺度形容詞と評価形容詞の考察に必要な道具を提示する。尺度形容詞、評価形容詞はいずれも、尺度上に位置付けられる形容詞になる。しかしこの位置付けには、相対的位置付けと絶対的位置付けの2種類ある。相対的位置付けとは2者以上が関わり、尺度上で比較するための相対的な位置付けになる。尺度には方向があり、大きさを比べる場合と、小ささを比べる場合がある。スキーマは(43a)になる。このとき用いる尺度 (43) a. 相対尺度 b. 絶対尺度



を相対尺度と呼ぶ。一方絶対的位置付けとは、比較するのではなく、尺度上の絶対的な位置付けになる。そこには具体的な値が現れなくとも、特定の値が含意される。用いる尺度を絶対尺度と呼ぶ(スキーマは(43b))。形容詞は通例、尺度上で一点を指すのではなく、幅がある。そのため(43b)のように、その領域を太線で示していく。見方を変えれば、領域があるとは、サブカテゴリーを作っているといえる。サブカテゴリーに属する成員が尺度上に並んでいるにすぎない。形容詞が絶対領域を持つとは、通常カテゴリーと同じく、カテゴリーとサブカテゴリーの関係をなすことになる。

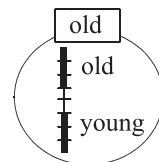
ちなみにこの相対尺度と絶対尺度は、相対立するものではなく、共立 (44) 相対／絶対尺度する。それを示したものが(44)になる。相対尺度の中に太線で領域が示されている。相対比較をする場合においても、形容詞が絶対領域を持つことがある。絶対値が範囲内にあるときのみ、その形容詞が使われる。



次に無標の表現を見る。同じ尺度上で複数の形容詞が配置されるとき、そのうちの 하나가尺度全体を代表として使われることがある。例えば old / young、tall / short など尺度形容詞には、どちらにも絶対領域を表す意味がある。スキーマ上では太線領域に対応する意味になる(有標の意味)。一方絶対領域がなく、単に尺度の意味で用いられる場合がある(無標の意味)。この場合どちらか一方の単語が代表して使われる。このとき無標の意味を持つ形容詞は、無標と有標の2つの意味を持つ。類例に(45)がある(久野・高見 2018: 151)。太字形形容詞が、有標と無標の2つの意味がある。

- (45) old / young tall / short old / new deep / shallow high / low long / short
 thick / thin **wide** / narrow **big** / small **large** / little **strong** / weak **bright** / dim

これをスキーマで表したものが、(46)になる。無標の意味は、カテゴリー (46) ラベルの意味と考える。ラベルにあるので、尺度上に絶対領域を持たない。一方有標の意味は、カテゴリー内の尺度上の意味になる。old も young も絶対領域を持つことになる。以上を踏まえて、次節から分類ごとに考察する。



5.2 尺度形容詞

尺度形容詞と呼ばれる形容詞がある(例は(45))。これは年齢、身長、高さ、長さ、広さなどを表しており、絶対尺度上に位置付けられる。尺度形容詞が be 動詞の叙述形容詞として用いられる場合、形容詞の変項(X_i)が、絶対尺度上の形容詞の絶対

領域と連結される(スキーマは(47))。しかし old / young のような尺度形容詞ではなく、具体的な値(数字)と連結される場合もある(スキーマは(48))。この場合、尺度上の絶対値と変項が連結される。さらに(48)の値がどのカテゴリーかを明記するため、カテゴリーラベルが現れることがある。それが(49)になる。years が引き金となって、ラベル[old]が現れる。この old は、年齢を表す無標の old である。表現の推移は、成員からラベルへの推移になる([トークン]→[タイプ]*⁵)。しかし(49)のようなラベルの現れ方は、形容詞ごとに異なる。単位が現れたときのみ、ラベルが必須になるわけでもない。(49)の類例を、(50)に示す(久野・高見 2018: 152)。(50)では無標の形容詞のみ適格になる。

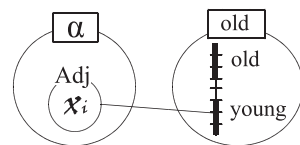
- (50) a. My sister will be 20 years { old / *young } next year.
 b. Meg is five feet two inches { tall / *short }.
 c. This lake is only 5 feet { deep / *shallow }.
 d. This mountain is just 1,000 meters { high / *low }.

次に比較に話を移す。まず同等比較であるが、久野・高見(2018)が指摘するように、無標の old を用いると年老いたという含意はなく、young を用いると若いという含意がある。そのため(51a)は適格だが、(51b)は不適格となる。

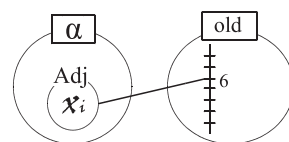
- (51) a. Kevin is as old as Meg, though they are both still under age.

b. *Kevin is as young as Meg, though they are both over 80 years old.(久野・高見 2018: 149)
 この違いをスキーマで示す。(52a)の形容詞 old は、無標の old になる。old は年齢について述べることを示すだけなので、無標の意味である。そのためカテゴリーラベル<old>が選ばれる(太線囲みで表記)。old はラベルゆえに、その成員の尺度上には絶対領域はない。尺度上の値が単に同じであると述べるに過ぎない。有標と無標の両方の意味がある場合、同等比較では無標が優先される。一方(52b)の young は無標のラベルの用法がないため、尺度上に絶対領域を持つ意味になる。つまり有標の意味となり、成員 young が選ばれるため、若いという含意が生じる。

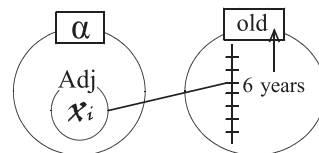
(47) He is young.



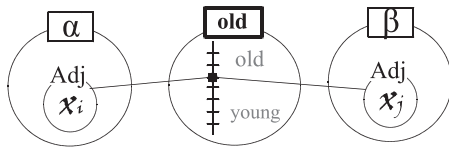
(48) He is six.



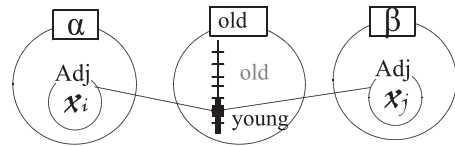
(49) He is six years old.



(52) a. The boy is as old as my son.

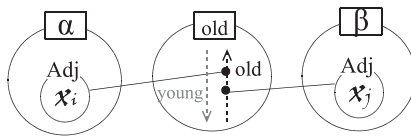


b. His daughter is as young as my son.

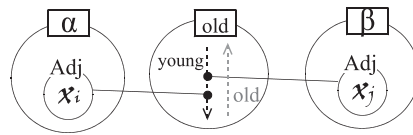


次に比較級であるが、(43)の相対尺度が用いられる。相対尺度は方向性がある。(53a)では α が上、 β が下なので、上向き方向になる。一方(53b)では α が下、 β が上なので、下向き方向になる。相対尺度なので、太線で示される絶対領域はなく、尺度上での位置でも同じ形容詞を用いることとなる。young や old は、若いという含意も、年を取ったという含意もない。

(53) a. She is older than Tom.



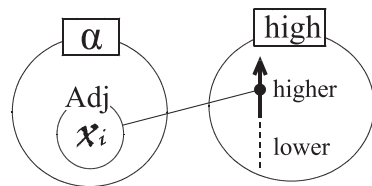
b. She is younger than Tom.



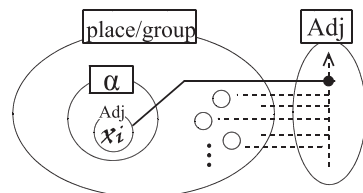
ここで than 表現を伴わない、絶対比較級について考えたい。これらは全体を二価的にとらえ、漠然と比較的程度が高いことを述べる表現になる。(54)のような例がある。

(54) the **lower** animals/classes, the **higher** animals, the **upper** classes, the **younger** generation, the **older** generation, **larger** women, an **older** man, **better** dresses, **larger** department stores (荒木 2005: 574)

これら表現は比較級であるためむろん、相対尺度が用いられるが、そこには絶対領域が含まれている。つまり(44)の相対／絶対尺度になる。(55)に示すように、絶対領域を伴う相対比較と言える。絶対領域と結びつけられることから、比較対象が不要となる。形容詞尺度が絶対領域を持つとき、成員の集合体をなす。つまり higher というサブカテゴリーの中の成員と変項(Xi)が結びつけられる。このとき変項 Xi はサブカテゴリー higher の成員となる。



次に最上級であるが、ここでも相対尺度になる。ただし(56)に示すように、 α はカテゴリー [place/group]*⁶の成員となっており、相対尺度で一番高いものと形容詞の値が連結する。



以上見てきたように、尺度形容詞は構文ごとに、相対尺度、絶対尺度、相対／絶対尺度が決まっており、構文の意味はスキーマで表すことができる。そして尺度形容詞は(3b)タイプとなり、変項を持つ。そして変項が尺度と関連づけられる。

5.3 評価形容詞

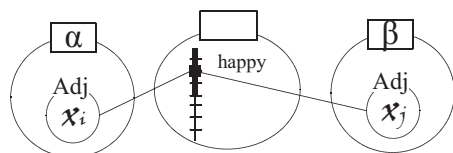
(57)のような評価形容詞について考察する((57)は久野・高見 2018: 158)。尺度形容詞は客観的尺度(数値)で表現できるが、評価形容詞は主観的判断によるものなのでそれができない。

(57) happy / unhappy kind / unkind honest / dishonest bright / dumb

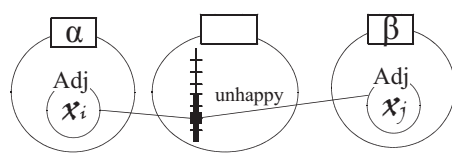
brave / cowardly generous / stingy experienced / inexperienced interesting / uninteresting

まず同等比較であるが、スキーマは(58)のようになる。評価形容詞と尺度形容詞との違いの一つに、無標の用法がない。(58)では無標の用法がないことを、ラベルを空欄にして表記している。

(58) a. He is as happy as her.



b. He is as unhappy as her.

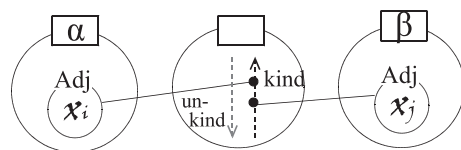


無標の意味がないため、絶対領域(絶対尺度で太線領域)を持つ意味のみがある。(58)では happy と unhappy のどちらも尺度上に絶対領域があり、その領域内の同一値が α と β の変項と結びつけられる。絶対領域がある意味なので、それを否定する(59)のような例は非文となる。

(59) *Kevin is as happy as Meg, though they are both quite unhappy. (久野・高見 2018: 159)

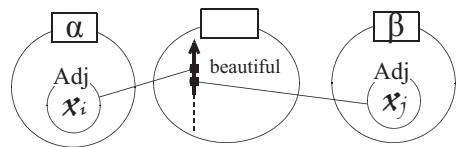
次に比較級の場合、尺度形容詞と同様に、相 (60)

対尺度が用いられる。そのため、形容詞は絶対領域を持つことはなく、どの値を比べるとしても、方向性だけが問題になる。上向きは kind、下向きは unkind が使われる。スキーマで示すと(60)になる。



しかし評価形容詞の中には、(60)とは異なるスキーマを持つものがある。すなわち相対尺度ながら、絶対領域をもつものがある。beautiful, brilliant などがそれで、(61)に示すように、絶対領域の中での比較になる。尺度は相対/絶対尺度 (61)

であり、beautiful は絶対領域を持つ。相対比較ではあるが、どちらも beautiful という実質的な含意を持つ。そのため領域外のもの(美しくないもの)を、比較するとき、beautiful を使うことはできない。それを示した例が、(62)になる。



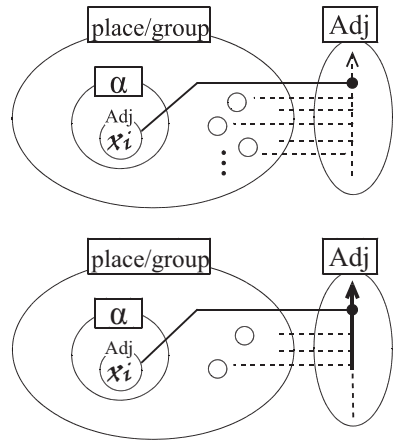
(62) *Neither this Persian carpet nor that Indian one is particularly beautiful, but of the two of them, the Persian one is more beautiful than the Indian one. (久野・高見 2018: 163)

なお(61)のスキーマをとるものに、(63)のような語がある。

(63) amazing, awesome, beautiful, brilliant, excellent, exceptional, fantastic, first-class, glorious, great, incredible, outstanding, superb, terrific, wonderful, etc. (cf. 久野・高見 2018: 166)

最後に最上級の場合、(60)と(61)両方に相当するパターンが存在する。スキーマで示したもの

が(64) (65)である。(64)は(60)に相当するもので、相対尺度の中に絶対領域がない。そのため単純に全成員を比較し、その最高値と形容詞の変項が結びつく(例は(66))。相対尺度のどの位置の比較であっても、その形容詞を使うことができる。一方(65)は(61)に相当する。相対尺度の中に絶対領域がある。そのため比べるのは太線矢印の絶対領域の中だけになる。絶対領域内にある成員の中で、最高値をとるものと形容詞の変項が結びつけられる(例は(67))。



(66) The day was the happiest day of her miserable life.

(67) The professor was the most brilliant man I have ever met.

6. 名詞カテゴリーと形容詞カテゴリーの違い

久野・高見(2018: 45-55)に、*She's a beauty.*と *She's beautiful.*を比較する論考がある。そこでは両者は同じ意味ではないと述べている。名詞の場合、矛盾した意味の形容詞に修飾されても適格表現になるとする。類例を含めてあげると(68)のような表現がある。

(68) an ugly beauty, a non-presidential president, a penniless millionaire, non-lawyering lawyer, a penniless investor, an indecisive decider, an honest liar, the freedomless freedom, non-committal commitment (久野・高見 2018: 45-55)

形容詞の場合、矛盾した表現は共起できないことは、(69)で確認することができる。

(69) a. *Joan Crawford is ugly and beautiful. b. *Joan Crawford is an ugly and beautiful actress (ibid: 49-50)

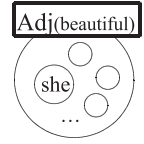
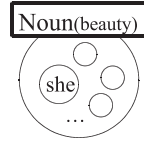
(69a)では形容詞をそのまま並列、(69b)では名詞の前置修飾として形容詞を並列しており、不適格である。形容詞のままでは並列できない。以上を踏まえて、久野・高見(2018)では、*She's a beauty.* と *She's beautiful.* の違いを(70)のように説明する。

(70) a. *She's a beauty.*は彼女の肩書き、俗称、あだ名が *a beauty* であることを話し手が主張する文であって、必ずしも彼女が *beautiful* であるとは、主張していない文である。

b. *She's beautiful.*は、彼女が「美しい」という恒常的特質を持っていることを主張する文である。

しかしこのような説明をしなくても、カテゴリースキーマを用いれば、簡単にかつ自然に説明することが可能となる。つまるところ名詞カテゴリーと、形容詞カテゴリーの特性の違いに帰結する。スキーマで表すと(71)のように同じに見えるが、実情は全く異なる。名詞カテゴリー(71a)の場合、名詞のカテゴリーゆえに、様々な種類の成員を許す。というのも名詞((70a)では肩書き、

俗称、あだ名と述べている)は単なるカテゴリー (71) a. She's a beauty. b. She's beautiful.
 名で、グループをなしているに過ぎない。そこでは必ずしも成員すべてが均質的で、共通する属性を持たなくてもよい。そのため<beauty>というグループに、いろいろな beauty が存在すること



となる。そのため an ugly beauty といった表現が可能となる。カテゴリー<game>の例を考えても、すべての game に共通する属性などないのと同じである。(71a)の主語 she は、カテゴリーの成員となるが、他成員すべてと共有する属性など持ち得ないのである。名詞カテゴリーは非均質な集合体であって、多様性を許す。そのため(68)のような周辺の成員を表す表現が可能となる。

一方形容詞カテゴリー(71b)の場合、形容詞の属性によるカテゴリーなので、その属性は成員すべてが共通して持つ。そうでなければその形容詞カテゴリーの成員になることはできないからである。形容詞カテゴリー<beautiful>の成員でありながら、それと反目する ugly の特性を持つことはできない。形容詞カテゴリーは、均質な集合体なのである。以上見てきたように、カテゴリーと成員の関係を踏まえれば、She is a beauty.と She is beautiful.の違いは、カテゴリーの特性の違いと行うことができる。

7. まとめ

本稿は、形容詞とその被修飾名詞の関係を叙述形容詞を中心に、カテゴリースキーマで表した。カテゴリースキーマは基本スキーマ(3)の2種類があった。(3)はさらに(4)に細分類された。また選択肢が想起される場合、タイプが変わることも見た。スキーマは構文または構造ごとに、どのタイプを取るか定まっていることを示した。形容詞表現を網羅的に述べることはできなかったが、すべての形容詞表現においてスキーマタイプが決まっていると予測している。今後の研究課題としたい。

注

- *1 Carlson(1980)では場面レベル述語(stage-level predicate)、個体レベル述語(individual-level predicate)という分類を用いる。
- *2 (27b)(29)で目的語から出ている実線矢印は、緒方(2018)では破線矢印で表記してあった。しかし<出現>の破線矢印と誤解が生じることから、実線に置き換えている。
- *3 実際には非能格動詞(i)、他動詞(ii)でも適格になる例がある。適格な場合はすべて、動詞は存在・出現の意味を持つ。安藤(2005: 764)は存在・出現の意味を持つ場合、非対格動詞と見ることができると述べている。

(i) a. Then there *danced* towards us a couple dressed like Napoleon and Josephine.

- b. There *walked* into the courtroom two people I had thought were dead. (高見・久野 2002: 40)
- (ii) a. There reached his ear the sound of voices and laughter.

b. There entered the room an indescribably malodorous breath of air. (Kayne 1979: 715)

- *4 (42)の Place は必ずしも物理的場所に限定されない。
- *5 years を後ろから形容詞が叙述しているため、(7)では実線の矢印方向になる。
- *6 カテゴリー[place/group]には(i)のような時間的なものも含まれる。
- (i) This was the happiest day of my life.

参考文献

- 安藤貞雄(2005)『現代英文法講義』開拓社。
- Carlson, G. N. (1980) *Reference to Kinds in English*. New York: Garland.
- Carrier, J., & Randall, J. H. (1992) "The Argument Structure and Syntactic Structure of Resultatives," *Linguistic Inquiry*, 23, 173-234.
- Huddleston, R. and Pullum, G. K. (2002) *The Cambridge Grammar of the English Language*. U.K.: Cambridge University Press.
- 影山太郎編(2009)『日英対照形容詞・副詞の意味と構文』大修館書店。
- Kayne, R. (1979) "Rightward NP Movement in French and English," *Linguistic Inquiry* 10, 710-719.
- Kimball, J. (1973) "The Grammar of Existence," *Papers from the Ninth Regional Meeting, Chicago Linguistics Society*, 262-270.
- 久野暉・高見健一(2018)『謎解きの英文法 形容詞』くろしお出版。
- 松井千枝(2004)「There 構文の意味と文体の研究」『京都ノートルダム女子大学研究紀要』34, 1-13.
- McNally, L. (1994) "Adjunct Predicates and the Individual/Stage Distinction", *WCCFL* 12, 561-576.
- Milsark, G. (1974) *Existential Sentences in English*, Ph.D. dissertation, MIT.
- 緒方隆文(2015)「There 構文のカテゴリー分析」『人間文化研究所年報』26, 77-91.
- (2018)「結果構文再考」『人間文化研究所年報』29, 41-55.
- 大庭幸男(2011)『英語構文を探求する』開拓社。
- Quirk, Randolph, Sidney Greenbaum, Geoffrey Leech and Jan Svartvik (1985) *A Comprehensive Grammar of the English Language*. London: Longman.
- Simpson, J. (1983) "Resultatives," *Papers in Lexical-functional Grammar* eds. Lori Levin, Malka Rappaport and Annie Zaenen, 143-157, Indiana University Linguistic Club: Bloomington.
- 鈴木英一・安井泉(1994)『動詞』現代の英文法 8. 研究社。
- 高見健一・久野暉(2002)「There 構文と非対格性」『日英語の自動詞構文』研究社。

(おがた たかふみ：英語学科 教授)

叙述形容詞とカテゴリー

緒方隆文

A Categorical Approach to Predicative Adjectives

Takafumi OGATA

筑紫女学園大学
人間文化研究所年報
第30号
2019年

ANNUAL REPORT
of
THE HUMANITIES RESEARCH INSTITUTE
Chikushi Jogakuen University
No. 30
2019